

『器用な日本人』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

様々な外的要因から円滑な開催が危惧されていた冬季オリンピックピックも、いざ始まってみれば、日本人選手の目覚ましい活躍のなか無事に終了した。

そこで開催中は、元メダリスト達の軽妙な解説に魅了されたが、なかでもスピードスケートで過去4回オリンピックに参加し、3種のメダルを獲得した清水宏保氏の話は重く、素直に納得した。

「金メダルはやった。銀メダルは惜しかった。銅メダルはほっとした。」という所感。不本意にもメダル圏外の屈辱も経験した人物の重みのあるコメントである。

そもそも全ての競技で世界ランキングが正確に位置付けられ、公開されている中で、レース。そこでの寸分の一秒の戦いは、トップアスリート以外には想像のつかないところであろうが、常人にも入学試験や資格試験、人事レースなど、金、銀、銅メダル、そして入賞するか否かの節目の戦いが存在する。これも同じ季節に行われるコンペティションである。

それにしても日本人はメダルが大好きな人種である。精一杯やりきったの4位や5位も、もっと評価してもいいのかもしれない。

そこで、スポーツとは全く関係のないところでの世界的コンペティション。

今月4日に開かれた第90回米アカデ

ミー賞の授賞式がハリウッドで開かれ、英国映画『ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男』でメークを担当した辻一弘氏が、日本人として初めてメーキャップ&ヘアスタイリング賞に輝いた。通算3回目のノミネートでの栄冠獲得であるが、本作で辻氏は、英国の名宰相チャーチル役の主演ゲイリー・オールドマンさんのメーキャップを担当し、チャーチルと似ていないオールドマン氏を精度の高い特殊メークで見事に变身させ、世界を唸らせた。

48歳の辻氏は京都市出身。独学で特殊メークを学び、1996年に単身で渡米。数々のハリウッド映画に携わってきたと聞くと、つい先日、ロスアンジェルスと日本を行き来する映画関係者に、特殊メークは手先が器用で、几帳面な日本人の最も得意とする分野と聞き、大いに納得した。

そして、先月に拝聴した東京大学・光嶋勲名誉教授の講演内容を想い出した。氏の専門とする形成再建外科とは、最近可能となった新しい外科技術を駆使して、失われた体の復元修復を目的とした様々な外科手術であり、生まれつき、あるいは事故や癌で失った身体の一部を、他臓器からの移植などを施し、可能な限り正常に近い形と機能に

戻す手技である。素晴らしい技術に感激したが、氏は、箸を用いた食事をしながら育っていく日本人の得意分野で、西欧人よりも、我が国の外科医に向いている仕事と断言する。

オリンピック
ク冬季競技、
映画の特殊
メーク、形成
外科手術と日
本人の器用さ
に感心する1
カ月であつ
た。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してパセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。
東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。
伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/>
名古屋甲状腺診療所（名古屋分院） <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/>
さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院） <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

